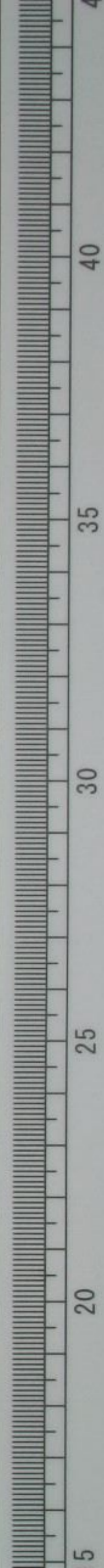




新五元集

坤

5  
1266  
2





細涼

意とつて

為今を根はしつてその川  
 七の門ちり笛は一草切  
 何ものおのの星の出  
 牛の戸の上もかきん根は  
 か所のの櫓の舟や意乃流  
 七月九の僧寺中たさるるに昔の  
 馬老の流着はのたさるるを  
 昔流より先華表より撞櫓  
 おり堂より社より山門の額に大なる院の

三才たるは三道教諭の宮殿也  
をぬくし一松の木の間は桐干  
をすまうやき子木勝男本えし  
わしと富の混交をりしを唯子  
中國のわしよとそゆ

桐經子著せしむるものを小忌衣

くわん

鬼行や揚屋川乃夕掃除  
妙法のとらふしおや言経電  
川川子造らるるしと龍威鬼柄

初光

乃ししも入相おひし速後  
茅買やそれしとまの撰好  
堯正通毒子りしとむん

六名止觀と云秘密

南宮宗隆佛古書法蓮華經  
ちい三十一六法名却備竹  
よの道をおもはらひのちむ所  
稲皮りしとち形とて雲の所  
橋毒のぼらるる事り  
しとあめり

雨雲のよきに直りしとあめり

東山家居し一

形なきハ痛も友よ世の秋と  
しちしはよふのよきそつ  
こふははりしを何しなはる  
かひとけし

焼米や嵐のころりし一掃

靈心寺

新米もハ舍利は似て供養

丁也こは祓を月夜に音

酒さる月夜に契成を也

是の才ありしは南の果を燈籠

名在屋より日暮し月ありし  
湖も金は又こころの

人をもて舟のひらよの五十里

孟蘭盆や死しものあは客を

子て後の船の女まで墓を

阿鼻焦熱ハアサの

精貝にハるあはる暑者

我氣の吾り取つ一盆の

弄龜兒

盆唄つけ子たぬれハ細工

〜僧の舟りよのつ

朝教も日は育いふつるあが  
朝鳥や咲しうかへるも何う  
心足雖貧不道貧又人入子に  
富る人形なんとしは昏まけ  
をいぬぬ一維新このかあ  
智者入るものかこしおと飛  
貧乏智田と何道り七十四  
余等山の程やぬきぬは福  
田のぬか行んばおならぬ  
この日にとち舞舞の油に花

上行寺墳下

お酒を酒よはもや暮らうし  
節も葉ふくさしおらち葉あがり  
多勢啼いこいしおらち葉あがり  
町の陣あつてもおらち葉あがり  
行よ酒のまのあつち葉あがり  
白阿のよもすうち葉あがり  
お毎ちめもよもよも物にあ  
稲むらう  
行海を酒のまこしや丘の松

秋まのいし道や花葉不賣

王子

伴僧八すまき綴や鎗おろし

於八百善羅漢會也

客とす一粒撰や蓮の版

惡疫はりの

阿ふいそふはしりや神のあ

祈禱の吟

育しきりしの身をたはら

ぬ惱の我うしひささうふ

種玉翁の髪又と女の度をしる道

ゆきしりさのしる服布作

のしる系作二としり明方

若鹿の遠人の今と夏衣乃

阿波の持しりさうとを

御盜法下とては違てさハ

幸形とあり

こしはのまあまのうし福のふ

先考九三周の碑建立

常とすの姓よはる田明所

龍軒翁



初巻九公遠字并舎曲川ハ秋深美の

係を直し

羽衣の扇をたのしきまこしなること

加茂川

夕りや秋の風を水乃限  
瀧の秋の風を水乃限

寂光院

名月と云ふ佛の光るころ  
十三夜や一臘の清水は皆てむ  
月ころやたす記つた人の空

清滝や鏡はくし秋の月  
名月やはりくし所と桂川  
昔園を西の燈を電りりあが  
なとせ秋の風をくし山の雲

三越の扇のころ

お月おおをむくしの有縁海  
お月おおをむくしの有縁海

月中什麼

何と形し月を居向ふ殿の中  
月を向ふかのし義人うな



かお後悦言茶るの

空窓も手して玉の月の宿  
酒の烟もなほかたけ居行

盛視後都もあつては我程は

なごふかたけ向ふ白く

まはら門を舞し  
とらぬはつし

二とありて中し一はる月の

さうして川越す人の初りお

たかおやわかふまはるし

夕隈よりまき切し 秋は丹

月やなうたににほす袖を

月と雲杜子舞う廣きあつて

満月のこゝろおめよる星月

お返り丹前かかん厚の

ま

いづら月も所もさの中

と看みしう桂をさるる月の

の行々作のあふの旅お

向らまらや毎中一遊ふ山の

さうの秋月のあはるる

三

贈佛骨庵魯文

韓退之佛骨を嘲る昔子之表  
嘲るその佛骨より八宗もあつ  
八宗強き可き後あつと茲ま  
一集友を此集子や佛骨の  
細末は江湖より交一日は  
吐く祖老は代りて

朝教りゆりてを  
韓退之

因一字記

鰻を食むるこのとくは列

内宮

西のたふと推してあり玉

外交ひつと仲のふり推し

かて子あり村持あり夜寒が

人丸の意

人志ありは染て居るしは子あり

船ありび川あり築木あり教

鮎あり焚火も築木の上あり

高かた西岸

三味やしの唄ありし年の雨

馬鹿やかの額もちま驪  
竹燈もあま塵たうむ早の林

玉律真

膝突るふあかちる砂の上

心相根

盆置く川やうまの花盆  
在心けまをる蘭の白くか

似心石の傍。所や山ウケ。三斗  
角田り。うまを。しん。と。り。三斗  
非茶の因縁未だ。と。茲。ふ。母。館の  
樹下。ま。う。り。

浮きしの流も果はらぬお茶の  
星合や梅子あくる大井川  
うた切れかこを扱蓋軒理  
盆もあふ所のお通う京ちう所  
三乃の周や確念のうはせ貝  
まつりくさうら枯く草簾

砂坡野薬王寺

笈をこそあこぼ八田るち刀魚  
實方の竟も交うも箱すらん  
秋のまらむ竹有るけ涼外

常間林おとけ

この秋の形つち影や夜羅尼呂  
盡しき常のまはる月あけ三  
青丹より桐の葉葉の影あけし一舉

隔帳

啼止て虫音のよほしく  
名りや古い形あけあり軒の影  
有向や秋の影あまきつ  
わづらおのれあける日あけり宿  
月影のあけりて水宿更替の影も  
あけりあり

父の影を思ふ

度くしてや遠く影の影

あはれにや

有漏無漏の心を空を悟らむは嵐野の  
影を思ふ人をもあはれにや  
辞也  
あまきつとあまきつや秋の影

秋馬の影

秋馬の影も角方あり  
影の影も角方の影  
行方よもあまきつ苗の影田畑  
ゆきよもあまきつ影の影

京乃信片の道なきを

魚燈の影のほろり 京の秋

道なきの

の宮

はまやまのさのけやふは木垣

仁和寺

はまやまのさのけやふは木垣

刻名電のさのけやふは木垣

餌を食ふ物の色やれの

五音

秋の空の綿や氷の徹掬

五音

舟の居し何れも形や池の

信正谷

一はらゝさのけやふは木垣

五音

橋を足のかさや外楽昇

住吉

あそ干箱もいせの岸の

舟おろし九存も松の都

夕山の羽りすま過るとんわ

後遊塞光聖とともにお法寺子清経の同  
ころの唱師二人を伴い彼方便品  
佛種從縁起とある

不屏の白粉のまりその後を

やけの夜のころもいせ

何れも晋子の肺所入

所時よのけやふは酒乃

今我此庵は三友ありていづれもあらず  
 ありて然るに三友ありていづれもあらず  
 卯酒ありて酒より去愁放盃を奉りたり  
 午茶ありて破睡魔ありて茶すまひあり  
 夕茶ありて向よ拂世をけり三友我り  
 庵にありて無不相違ふ道明の堂室とし  
 りて復友ありて室ありていづれもあらず  
 塔の本の周りをまわれば東寺の住持あり  
 龜田川はもとありて加賀うつらありてあり  
 奪子河田よきありていづれもあらず  
 ありていづれもあらず宮樹ありてありて  
 いづれもあらずいづれもあらず我をわたり  
 けり我は金銀ありて三友ありていづれもあらず  
 解ありて哀富儀ありていづれもあらず  
 笑ありて喫茶禪味ありていづれもあらず  
 後ありていづれもあらずいづれもあらず  
 ありていづれもあらずいづれもあらず

わが水はよき水の流も夜の音

いづれもあらずいづれもあらず山根あり

大松の秋ありていづれもあらず

ありていづれもあらずいづれもあらず

善くありていづれもあらずいづれもあらず  
 錦繡ありていづれもあらずいづれもあらず  
 也落ありていづれもあらずいづれもあらず  
 ことありていづれもあらずいづれもあらず  
 ありていづれもあらずいづれもあらず

いづれもあらずいづれもあらずいづれもあらず

羅漢寺

押つて並し居ても秋の昏  
芥はよ草やとことむし  
鳴実やる羽の聖の書りし

二荒

身も抛してまよ入瀬秋寒し

三春の花一夜の月風光暫れども  
女宿したるさうい草産を志原乃  
雨はよしの色去すの秋も大にの春  
能むる月の松を捨いさし秋の  
三とせよさるる東湖の庵もよめら  
恒破の軒れとちかハのりあけに

幸浪舟の具たらん子来よんさ  
あは備るあ半舟あつて彼金さ  
子もさるる雨をなす韻を次

今や月秋雨さる月の思つるま

悼三浦乾也

あーくま波の寤れおは  
行くくあをいさるん存の声

諸國洪水甲申の

吼止てはるまよ秋の水  
貧を涼し乾衣の裾み  
活花よおわらるるはなは







時をわたりておぼしきものありき  
こころをいかにしむるに  
たすけをいかにしむるに  
見しるに  
深遠の煙もりのありけり  
初はたつとくさしや石の孔  
をたつた心とてはたつた  
あつた葉もりのありけり

讀菩薩戒經

念ふにともくも父母を  
えはるるのありけり

軒親機を尋のありけり

草の子も培ふにありけり

東屋を伯

舟のありけり  
築のありけり  
人のありけり

芳香月灯

寺のありけり  
僧のありけり  
おぼしき女のありけり

露の夜の露の夜もあはれ  
秋の雨よあはれと恨ま  
つらき事ごとくすれは  
眼の國のあはれと恨ま  
あはれに錦おほまめ  
もあはれと恨ま  
習うかまよはれと恨ま

七五冷規

子習の巻よあはれと恨ま  
あはれと恨ま

五寒の夜の露の夜もあはれ  
あはれと恨ま  
あはれと恨ま  
あはれと恨ま

横須賀松舟

船造の本よあはれと恨ま  
あはれと恨ま  
あはれと恨ま  
あはれと恨ま

わがこゝろを草を葉を  
曼珠沙華

山中温泉

水も啼暉 櫻やお羊の秋  
小持主の造りかきし 伊都は  
月影も 尚きくもこ 湯葉のく  
宮守乃 油の 神や 宿し くとく

舟目尾上梅幸集

祖父の因言も菊の白らけ

自有延年術

菊の日や花よりけり的小酒盞

大暮の移りもや 夏の子  
水何ぞ八家あり 菊の山は下  
雨降のさる白らけ 菊の  
け日比の移りかきし 菊の  
旅り

柔暖そ加田の 離りのれ吉

後の世りよ無下るおのりよ

白菊は心けりけり 周は  
水越るる果るるをぬ 木の下  
先ぬき八好はぬの 朝のけり

蟋蟀暮秋こもれとてかきこふる  
たのしみあはれいとの膝ゆき  
あしの破きあんとせしくる河  
津にた雨敷の日はあまはるこ  
箱膳ははとほされぬい

醉吟

黒塚の五葉はさこそや蟹の壳  
多しある雨りつ度とてお照  
寺嶋村吹り  
多し干す畔のさうや仲の花  
中将の垣もあまやあふ花

葛城

有向やふる醜よ山岩もか  
奔り里もあむの垣り破られ

人の名は雨の成る我々のあをた  
とけまわれし算回のあま一見

時雨の裏はすす極のすまふ  
三ツ

定家  
寂蓮  
西行  
るむるくも西はた浦の秋  
淋しきもあはれものや松か  
雨の向誰かこころは這入らん

蘭の香の西苑の乳の雲下り坂  
とくもーやるのむね木の葉のつる  
乃成寺

あつたにしく人待りの障の色  
夜明けの水をほらちよとく

安達原

あつりま果も骨の重寒やが  
散りし柳ハとを尺鞠の袖

は急可部

須戸の巻もあつたのたもまてん

雪中庵の翁をよ延室井安仙をよあて  
閑素出極の向いこ

のくれあつたあ花ふを清さのた尻  
ニッて店とし文野の勢小

秋日和丹戸城をんと通るる

あつたすの鶴りし羽も飛さ秋の帳

福くらの宮奉納

あつたさや片空形の星も夜

あつたあつり和歌向や影照中

誰とあつて安達山裾の青つら

あつたあつたあつたあつたあつた

八月やその底よりこらもす

妻のいの猫よくおしけるの標

昔より信州のたつしほむらうちのいり  
仲たを揚生をりぬきしりや六つり

八高兵衛の世帯は信や虫拂

八百善沙山に向

面礼を積柳ぬやぬ行多お

限るは牡丹を形草のふ

稻ありは裸り葉や帯仁山

養壽院より送るていさか柳をこ

赤くと鳴るのふよ月ひめ

有馬客中

甲府のちる原のふやふの窓

昔判をり

ひのちのた男よとらして碇下

海晏寺

又覚のちる海のこしをみろ

星拜むむい八幡さへ影のた

ものふの舞いりの車夜を去お

そつ性も二なるのたさあはりの道

おるや河のふとこの旅の道程

日蝕  
美人  
結衣

た秦

君まきふからのお宿や摩訶羅水  
物も丹徒もとのまをけり虫送  
いさかいたくみのひまをし  
わづらふ春は掃きを置来さ

石上川

炬のまは鮎を淵のたゆみ  
扁知面して  
さうらつん狐の智直や菘の舟  
焚えと八徳もささる八原松の

弱まやも思ゆまの袴まの  
ゆゑれの葎め分草のまじ  
草の毛のひまわりの鹿のまじ  
新衣をたよむ

いしあまや輝吹花をし新の春  
白鳥やの周のまのけし  
玉草のまをわの草のゆめか  
里やわらわのまのまのま  
新衣のまをまのまのま  
わのまのまのまのまのま



是のふかき水は舟の底を  
ゆるぎなく流す  
打とくしと重なる舟の舟

初川寺

芭蕉のふた花の舟の俳諧提

信貴山

山踏りけし梢のむしのすけり  
虫の吐きしきし山の雨  
ひそかにこころをたのむ  
秋の日はしるべきをちりく

日光

先橋の赤いおのの這入口  
落るるや橋下は水の上  
是とよむるおののせ八ふたふた百ふ  
又とよむるおののせ八ふたふた百ふ  
—のままたち伏す鹿のあまらか  
けおの目乃入橋を小雨降

圓通堂寄居

圓通堂の軸の角ふと重なるか  
おののしるべきをちりく

榛右

貧乏糸早寒と

日浅雪の深き河の十三夜

逢うてかむ鹿の涙やゆめ川

刃のしるおひさしうらぶらま

行先山崎にてうらむ柳を牛田の  
家居よゆ

白ふゆを草花賣のりあは

は昏てかよおれの日影やかり河

俺の川もさき

かよふ舟り石の空にこも里想し

秋のり穴こそまゐれ古まゐれ

初めは河の形へのまゐり

父の骸を改葬し

村のまじ鬮髯を袖に巻か

何経て時をわらぬおの松香

臘ハヤ佛の相一もせりおし

其角堂俳諧之茶

客をよむ裁春湖意公下権

時雨まよ竹の河原の青みしら

欠摺神といふ集あり

けふと六時つゝまはりのし

夜時雨や神も人我もむし人

宵の月一乞晴し神も人

初時雨諸葛の散音もあ

蜻蛉謀深穴鳥影占京枝に

片竹生柱何とふし

辛寄り風向の時雨の松葉荒

羅旅

るし懐らるる時雨を竹葉

さる方の加なみ

片神といふいふ

時雨もつ住居もつ

和詩イキ

詩家子樂天有と古括を補ふ

俳諧り我翁もて不易を論せり

古池の蛙を屋山の雨を

花のやの落大花を歌せ

さるしは時雨もつ



乃て日向をうらみたる津の巻

画讀

霜清りて魚釣の魚の余が

霜月やさしき松の山  
畑の土當りぬしほる味

雅司の

それゆゑ賣りて秋のころの神樂  
産屋のたけのたけのたけのたけ  
と吹いた別をぬきたる産屋が

致宗の嘆き

祐成の小磯の飯の料理

と吹や小松のたけのたけ

産屋のたけのたけのたけ

訪蒐好

山茶花のたけのたけのたけ

とんぼりお交りたる 鞠盆

植木屋の小松のたけ

魚のたけのたけのたけ

松魚のたけのたけのたけ

てゝ間もなほ押さへ磯  
の岸々油吸のし小籠を鳥  
よの峯より懸いて祈り

又水三羽ののり形  
出づるを名はる事帳の固  
一巻の紙に中ぬ川に葉のまゝりの  
ゆるゆるい海の方よ  
ぬ色にわたりし炎の下を流れ  
いてた君しき方ひなげま  
湖の庵に佇むまの  
川を流るるを心  
しるる

碧山品とまぐららの壺の真下

師をりすの晩法章附本

いふが流れぬ家の一世の縁を切  
百年の懸念をなす松の影

水氷や氷も解も唯一也

まはさして氷より上の氷もな  
まのり茶ねたるもの有樂垣  
舟の子着ん野山錦まも道

宇治

誰の心か細川の流る朝霧山  
残るは山よりまを木の花

夫木の葉枯るべしとては花のつ

星崎

例時付たまりも周の路

走來生計

家霊を首つけたまはる巨魁は  
ちしきのつとふ活する心からし  
を枯や沼たぬつきの家二軒

靈山こそ

擋障の羽もこら枯り草のた  
達摩忌の細きけも麻三行

にほど我を衣のわらをも

龍女得いづの文はよむ

る子孫はつと佛の教り疾か

心羽百回法合修り

枯る後屋元はつる雲とほ

いづれ何事も杖を止

義仲をたむらふ

凡そこのおよばせらや散る葉  
はあつてはつと川と布国は  
早川や比叡のたげ雪々時雨

美濃訪入

しこの初雪がれ遊目白

初雪や青いよつこし一箇の雪  
た所雪の雨よあけ手か  
初雪や海一面のよみ

吾妻橋上

青い筑波雪のよし

悼閑雪江

拵を拵ひしを誂ゆるを佛

雪の日は冬もほろろなる雨降らん

十國峠 地蔵堂

極楽の橋火の道ある宿  
雪ちりやる日籠り袖り上  
酒かたのさの江中や四つめ  
夜の雪しき世の人の酒さる  
雪の里貧しき世の人の酒さる

わかれあはれをよめる

昔も今も常陸の舟のあはれ  
夫講 尺黒天の女なる



閑居

雪の心も雪の影も雪の心も雪の影も  
灯の心も雪の影も雪の心も雪の影も  
くすくすの心も雪の影も雪の心も雪の影も  
雪の心も雪の影も雪の心も雪の影も  
雪の心も雪の影も雪の心も雪の影も  
雪の心も雪の影も雪の心も雪の影も  
雪の心も雪の影も雪の心も雪の影も  
雪の心も雪の影も雪の心も雪の影も  
雪の心も雪の影も雪の心も雪の影も  
雪の心も雪の影も雪の心も雪の影も

焼籠

契廟

族親を袖のさしや母の香  
雛  
佐所の物もさしや母の香

何ぞよ小松林のさしや母の香  
何ぞよ小松林のさしや母の香  
何ぞよ小松林のさしや母の香  
何ぞよ小松林のさしや母の香  
何ぞよ小松林のさしや母の香  
何ぞよ小松林のさしや母の香  
何ぞよ小松林のさしや母の香  
何ぞよ小松林のさしや母の香  
何ぞよ小松林のさしや母の香  
何ぞよ小松林のさしや母の香

わさのまや河夜廣胡の園の口

石別屋の暮す社

いらとも子檀二ふし何れは

市人の鯛を鬻や降ありぬ

八段

外さぬや入目のしり男山

佛頂禪師同色蓮森羅万象の地  
のや答未羅方よりけりしつら  
器を歩擲シラ什麼

初霜や廓然とて水の月

川ぬさる

好許口ふ衣羽織のりらぬら

我ま竟こころまをしやうも

知この月さるあよの心

新しきあよしなれや

戸訶止觀

一目羅不能の鳥得る羅只是一目

一目のおお小判や會式寺

宝土を賣て強版の心經を換

流りし鮎のくねる寒りあ

錦帳のよもあふり砂子おる



什麼と生肉菓はつやわつ様ら

三条橋上

立向ふ事もたつとち冥念化

かや

既成るる音はかけし心同

てしう灯の火根は興了價は

病非の古着形をむし原をま

こまう子の影下管じやぬし竹

まをゆふ月のもく屋を季の布

くく水の世を茶の泡にや序の年

との能やいつく浪の帆を舟

乙卯十月二日 松平忠房の御書を(遊色也)

信解蓋ありの度は一たを回す

まふひ也すあふあさく霜柱

盗人の物さくしおん

抄行越

あふのこり舟の古らや老隠り

ゆき薄の知の世や老の口

庵の夜やちつとも山老の想合せ

瓜不持てし柄は何をも浮不の

海井火子彌このまいひ花火外

お水争斗未止ね

多量の庵ともいふ雲の中

事をもととししれここの目

僧院も十字にわらも耶蘇を

はまらふのそとに海着を

かきまふ所はつとて初と内 は美

か

年のおとす貧乏の八件枕

不二のふとりのまはりこを

はらひつらん はらひつらん 二十の宿

卯時混交

暇の衣れやは白く鹿の色

白衣観音を画て

日月をたふぬ水 阿耨多羅

布衣讃

白尺の染むのこらや 月と美

夢想辞也

有佛乘佛は是也

五才は は 佛母を

くみれおれを 飛 のり

福音の里をさへいふ三寶の如きは  
標の如し

昔の季にやりのこころにまじりて  
三昧の如くは物にまじりて  
心雪ふるはまじりて

双林寺のまじりて

とてまじりて蓮の如し

釈の白髪をのこすはまじりて  
世帯の如し

わが種をくまひて  
頭巾着しぬた入る身  
色をくまひて神と昔は懐がた

花の如くはまじりて

碓氷の白骨の如くは  
所懐

かゝるに無の如くは  
高皇寺

紫枯一照の如くは

起るれ粟むしは居る  
晩の如くは入る  
おそく又まじりて  
稲口初時雨  
とほの外花の如くは

針の糸

三手勝きひらく雪のゆめを

賢人オキビキマコリ唯道心と墮とを

しきり巻の書物よま

ゆめをたのむよはてしなく 栞尾花

りし今守門スギのまじり方めち

三舟寺號休

とこをよのたぐり舟四社の巻

山にゆめを

福ころの細く塔立のる左所

日本堤

月光しをたてて遠をすむ

鷹の白霜吹ちすす乾草

天台論儀の題

二兼華嚴別堅何やいふこれハ

雪をこれ解き八甲一息の水

夜寒をふききけりもほろりよ

げ川の魚をこれと内飛の日

仙名

二階の竹杖しちる縁柳

啞雁標標キニ子ト一の目  
手の傳ふはのま物とて

石別忌

閑といふ一字を拜むはをが

祇園

棒突り昔に於て白おと  
は秘振し人からや一も  
降中の雪端のしる 行を

唱婦三穴時を白おといふは序のた

仰せられたるのよりの

可しの声操乃むわらふ

葛のまゝのいふあつたの空

三月三十日

空のまをちよと曆やむは

三遠まを返

投てあて長生をのちをい  
散あき楳の中や長命寺  
雨を連なり暮もいふ長衣

抱一上人

朽ぬるりせなる幹也雨のま



冥よりく浅き夜水も  
清き上野の湖をこしら。諸行  
無常の花の色。あとしよ名が  
流る神。ほよよさき夜半  
なれた。

うさしくたまの世はき周

何妨

水影や煙りゆる不二の山  
山松の音もかむの上唯だ  
揚福の花お入よ沃藏目

出居

木の根を根群を拂し善哉庵と  
とりに晋翁の墓を神ふ

ふいふふの山一壺ア石の苔  
夏めく月おしのさわれ美

吹哉

皆ちの樂よほくや木と木こ  
鹿の子乃よほくちりく母子神  
杜る提きをしん人を誰  
笠電研不二し移る色なりや  
竹植をぬれぬん行る

乃外々ちる水あまの吹  
第木の葉子ころの雨向水

形川所より正所の流をこころうか  
しつらたをきき

小式部内侍

所乃と賣としらと世向世

藤原社

白浪や松や一葉まき本所様

天女の廟

様乃何松のけり行の衣

糸乃乃一重の形人そち

蒼路や冠をうもふらん

たすく標をあらう心むの上

箕面まで

赤きころの道は心む三千里

阿波の宮より  
ひさし  
世の中をいかに  
柳の裳祓  
くも哀まを  
くも哀まを

くめら枝を津理の集り後

梅草百種

實盛

百回之内

舟をいよりの波や比叡からし

いろよの権ち

あし梅の傍をくまのたのふ入所

赤恒源哉

くら先舟まや雪の赤合羽

延命院

狭い間お窓の古築くめし龜

清水一學

石のおや酒の酒まも山鹿流

お守

ま所たつお岩ち雲のいささき

夕秀

あおらいつ所のはやりの灘

扇お早良

あ月や夜毎の芳ともし橋

山三

言傳を三か傘や花の雨

仁林澤正

ぬちあしし朝あや泥洲嵐

藤若

井の水よ玉まは河よ土田が

師直

舟の所りの船の匂を人信く

下男小助

只くたのころころらや縁の茂

福屋貞

に切つこのたよとあん切

清玄

水つーさき花舟の友胡や古高の巻

日吉丸

橋もあしをささいらや舟の箱

しよ

阿片はさきれりはぬる箱を

松下雅虎の切片ハみき人を論ひぬ  
仲庵の手押ハ信をくしゆ仲しき社  
はる島とを渡りて一重かたハ破れを  
横野ハおろす

粉をまき好むとくしよの箱

祖先の御製廊十牛

尋牛 人影も三尺坊やあつらう牛

呼牛 草季ののたつすめや占やん

隠牛 かのまきもこしよにさし酒の欄

貧牛 百八の迷ひりし夢の師を小  
 回牛 妙哉や人行合の辻の  
 番牛 鹿ねて誰かたしと小人取  
 無牛 みらぬるさの月の建鏡  
 半牛 岸のむし見てもちり小住城  
 送牛 新りやる果の夢の穴橋の時  
 老牛 阿のまの指し居るく頭巾

け 後さちの運せら死むの旅  

 阿のまの指し居るく頭巾は  
 阿のまの指し居るく頭巾は  
 阿のまの指し居るく頭巾は  
 阿のまの指し居るく頭巾は

東台夫嵐堂之記

和言評

準提尊より三密曼陀院前大僧正範海師より傳來り  
 号像也 降魔大沙の殿山松川直心院より來り  
 安道形より來り、直心より奉公にせ給り、阿のま守と  
 阿のまの直心維新の原慶寺より來り、京の人  
 清水王樹より來り、阿のま守と、佛母より  
 阿のま守と、一字創立あり、權僧正普海より來り、  
 阿のま守と、藥師尊より來り、地藏尊より來り、都極樂院  
 より來り、阿のま守と、阿のま守と、阿のま守と、  
 五輪三尊の阿のま守と、三浦丸也の阿のま守と

増田も遠く刀りし津之小川松氏に

この文字の流十二年二月九七のあま

吐舍利以藏此塔為牌

永隆姓の積名其之文政六年十月

吉乃松下谷証書父老翁所母室是也

皇天亥月亥日亥刻生九七歳なり

竹屋も尾大和向十重禁を拜する

明治二年卯五月廿八日

何のいふもその母の墓なり

明治三年三月九日出版御届同四月十五日出版

編輯兼  
発行者

晋 永 機

三公園九号才二番地

印刷兼  
調剤者

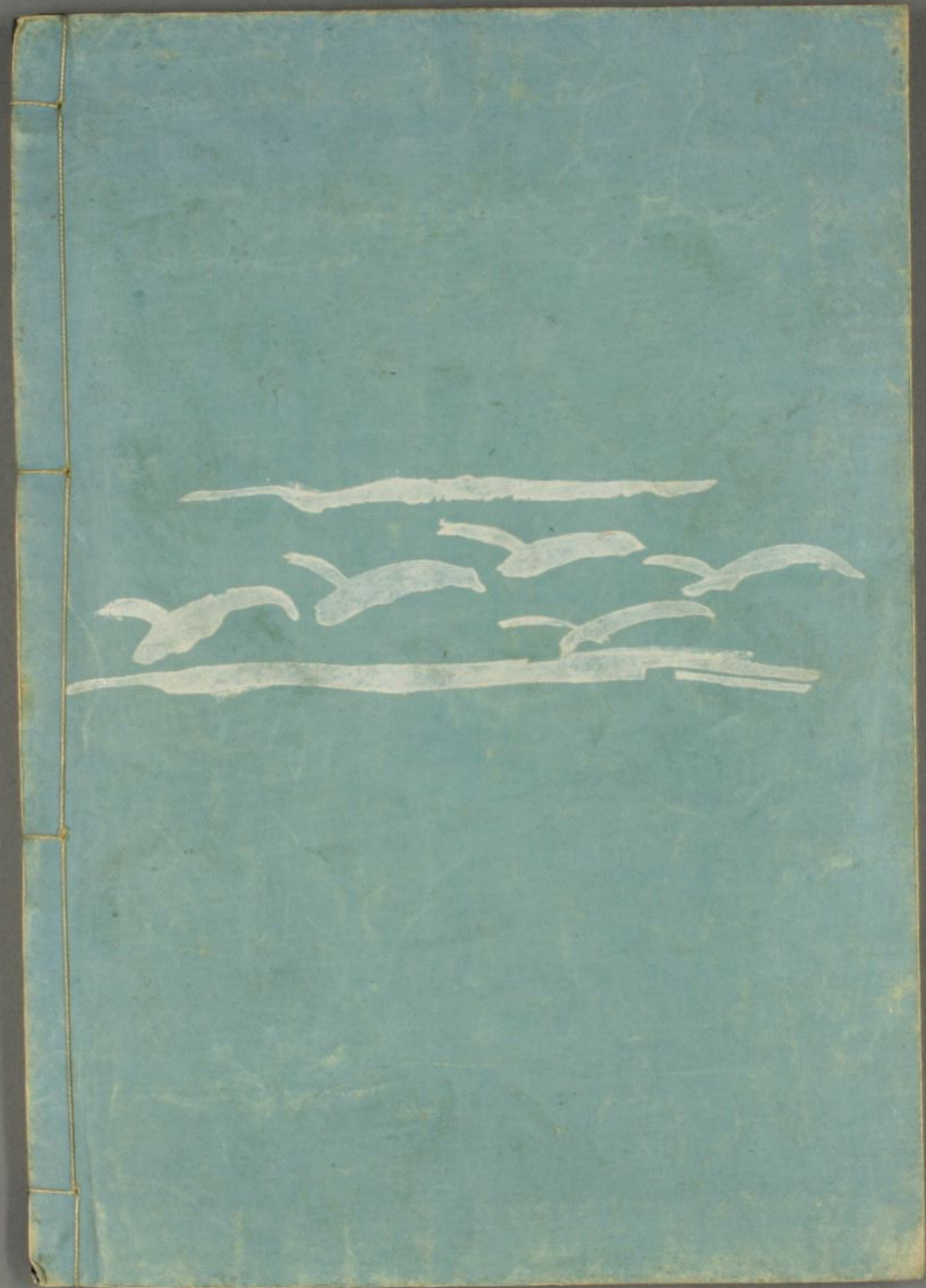
依後竹次郎

神田金沢所九五番地

發賣人

松奇半造

淡州須賀田十九番地



江陵先生文集

新五元集

門人等持